

證 誠



如来世に出でたまう

お釈迦様とは、どんなお方でしょうか。

この世には、人が互いに傷つけ合う無残さが、途方にくれるような厳しさが、いたるところにさらけ出されています。そして全体が、言いようもなく空しいのです。だれ一人としてこの世の厳しさをまぬがれて、清らかに生きることでできる人など、居りはしません。だからこそ多少でも敏感な心をもった人は、そしてすこしでもこの世に生きる意味を真剣に考える人は、本当の安らぎを、生きる力を、人生の光を、切実に求めるでしょう。

お釈迦様はこの求めに答えて、この世に来てくださったお方です。だから如来、つまり真理から来た人と仰ぐのです。そして私たちのこの切実な求めが満たされる道として、すべての人を平等に救おうと願う阿弥陀如来の本願を、説き教えてくださったのです。

このお釈迦様の教えを真剣に聞くこと、そして大悲の本願にめざめること、ここに私たちの一大事があります。

「一方的な」めでたしめでたし



真宗山元派宗務長 佛木 道宗

謹んで新年の御挨拶を申し上げます。

慈光照護のもと、皆さま新年をお迎えになりましたことお慶び申し上げます。

日頃より当派本山の諸法要をはじめ護持發展に多大なご理解、御協力を賜わり厚く御礼申し上げます。

さて、昨年の十二月一日付朝日新聞に全面広告が掲載されていまして、

「この文章と文章に衝撃を受けて、しばしこの紙面に釘付けになりました。」
これは、日本新聞協会広報委員会が「しあわせ」



ボクのおとうさんは、

桃太郎というやつに殺されました。

と、見ての通り、子どもらしい文字が綴られ、その下に金棒を持って涙を流している子鬼が描かれているのです。

私は、この文章と文章に衝撃を受けて、しばしこの紙面に釘付けになりました。

これは、日本新聞協会広報委員会が「しあわせ」

をテーマに実施した「2013年度新聞広告クリエイティブコンテスト」における、〇六九点の応募の中から選ばれた最優秀賞作品です。

この作品のタイトルが「めでたし、めでたし」となっていて、新聞の下の方には次のようなメッセージが記されていました。

「一方的な「めでたしめでたし」を、生まないために。広げよう、あなたが見ている世界。」

私たちは年輪を積み重ねていく間に、自分の考えを何の疑問もなく良しとする「一方的なもの」の方に凝り固まっていきました。そうした傾向に注意喚起をうながす、大変シンプルでインパクトのある広告に思えました。テーマである「しあわせ」についてでも、いったい何がしあわせなのかと問い返すべく、石が投げられているように感じました。

次に、喜に報恩講のお参りにおいでいただいた、八十歳を越えた女性の話です。その女性は、現在腰が立たなくなり、車いすの生活になりました。

「こえんさん、もうあきませんわ、こんなんにならしてしまつて、なんか悪いことをしてきたわけもないのに、なさけなくて」と、車いすのまま足をばたばたさせ、足は何ともない、ほら、こんなに動かし、身体もどこも悪いところがないんやけど、ただ腰が立たんです、もう二度だけ前のように歩いてみたいトリハピリにも行ったりしてんやけど」

涙ながらに歩けなくなった悔しさを切々と語られます。

五十代でご主人をガンで亡くされましたが、四人の子どもたちを育て上げ、孫たちにも恵まれ、

町内会、親戚の付き合い、時にはお仲間と旅行を楽しむ生活でした。今は、ご長男夫婦と同居され、主にお嫁さんが介護をされています。私はつい、申し上げました。

腰が立たなくなって、見えてきたものがたくさんあるのではないですか、お嫁さんにありがたうを言う回数も増えたとし、リハビリの先生に励まされうれしくなったことなど、いかがですか。女性の嘆きに、何か違った方向から、車いすになった今の自分をみつめることが出来ないだろうかと思ひ、発した言葉でした。

女性は聞かされずに応える人なのに、このときばかりは返答に戸惑っていました。

私が間違っていました。

女性は私に何を聞いてほしかったのか、ということとです。車いすになって以前のような動きが出来なくなった自分が「なさけない」と、そのやるせない気持ちをこそ、女性はただただ聞いてもらいたくて、一心に涙を溜めて語ってこられたのです。

私の発言は、女性の思いを操作する驕慢にも思えるようなものでしかありませんでした。

女性の思いに添わず、自分勝手なこちらの思いを押しつける、まさしく「一方的な」めでたしめでたし」でした。

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よるすのこと、みなもってそらごことたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします

聖人の御言が益々響いてきます。

正信偈(六)

金子大栄編著「意識聖典」により少しづつ「正信念仏偈」を味わい聞かせてもらって聞法を深めましょう。

天親菩薩は論を作りて説かく ひとり天親論を説き

無碍光如来に帰命したてまつると 無碍の光に帰したまひ

修多羅に依りて真実を顯わし 経のまことに応えてぞ

横超の大誓願を光顯し 弥陀の誓願をたたえつつ

広く本願力の廻向に由りて その願力に賜われる

群生を度せんが爲に、心を影したもう 一心のむね影わしぬ

功德の大海に帰入すれば 名号の功德に帰しぬれば

必ず人会衆の數に入ることを獲 かならず聖のかずに入る

蓮華藏世界に至ることを得れば 永遠のみくに至りなば

「祖師750回御遠忌諸行事」(案)

『歴史展』原案要旨

福井県 西蓮寺住職 森永 建紀

本山所有宝物の検討分 一本山記録一

名称	表	裏	作者名	形状	材質	法二(本紙)	寸法(縦横)	製作年
最上人繪像	梵天のふたりのみまき			一冊	紙本漆布	紙 52.0cm × 横 34.0cm	全長 51.8cm × 全長 34.0cm	江戸時代
最上人親筆聖人遍座像	梵天のふたりのみまき しんぶんじょうぜんなんのびざう		信知上人	一冊	紙本漆布	紙 51.0cm × 横 30.0cm	全長 51.0cm × 全長 30.0cm	
真宗本願樂舞家 繪	しんぶんのほんがんがく まねのほんがんがく		藤本宗子	一冊	紙本墨書	紙 30.0cm × 横 33.5cm	全長 30.0cm × 全長 33.5cm	七人八年
元山親筆御印	元山親筆御印 げんざんしんぶんごいん		元山親筆	二冊	紙本墨書	紙 10.0cm × 横 37.0cm	全長 10.0cm × 全長 37.0cm	元禄
物部左井二尊求道繪巻	あまのぶつにふたご ぶつにふたごのまき		物部左井	一巻	紙本彩色	紙 41.0cm × 横 17.8cm	全長 40.0cm × 全長 17.8cm	鎌倉時代
字名一	かくしあまのぶつ		元山親筆	一冊	紙本墨書	紙 123.0cm × 横 43.5cm	全長 123.0cm × 全長 43.5cm	中心期
絹本草	かくしあまのぶつ		物部左井	一冊	紙本彩色	紙 62.5cm × 横 37.0cm	全長 62.5cm × 全長 37.0cm	承元
字名五	かくしあまのぶつ		物部左井	一冊	紙本彩色	紙 74.0cm × 横 34.0cm	全長 74.0cm × 全長 34.0cm	文永

本山の他の検討分 一大日本寺院総覧一

明応8 後土御門天皇御嘉納品

- ① 香、衣 ② 菊花御香具 ③ 御中啓……

嘉元2 後三条天皇宸筆

- ④ 「山元山護念院証誠寺」勅額 ⑤ 「勅願所」宣下

為本記」記載の山元派和譜3種

- ⑥ 松風節 ⑦ 馬形節 ⑧ 船歌節

白坊の御遠忌法要に携わって

福井県 川越寺 高僧 信願

本年十月十四日（体育の日）に我が川越寺にて多くの関係者の御縁を頂き、五十年に一度の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要をお迎えすることが出来ました。

平成二十三年六月、法灯が脈々と継承されている横越本山にて、各派の御門主様・宗務長様方をお迎えしての御遠忌法要とは、また違った緊張感に身の引き締まる思いでした。

今回の法要は、御法主様御親修のもと、衆人による雅楽の演奏や僧侶および助音僧による説経・登高座・表白に続き行道散華等、厳かな法要に胸が熱くなる思いでした。五十年に一度の法要をお手伝いさせて頂いて、大変うれしく思いました。

法要中は本堂の後ろに控え、相焼香や配経等の係を弟と一緒にさせて頂きました。

式務の本覚寺様の御指導のもと、失敗しないようにするのが精一杯でした。

若い方の中には、宗教自体に興味がないとか、自分には関わりがないと考える人が増え

つつあり、だんだんお寺に参詣する人も減ってきています。悲しいことに何かしらの行事が行われないうちに人は集まりません。虫は光のあるところに集まり、人は面白いところ、もしくは興味があるところに集まり、最終的には仏様のもと、阿弥陀様のもとに集まるのです。

法要の中で、大勢の人とご法話を一緒に聴けましたことが、とても有難いものでした。

今回の法要に際し、多くの人々に助けられ、支えられていたことに深く感謝しています。これからも、お寺のことを含め、色々頑張っていきたいと思えました。

「えらばず、きらわす、みすてず
「くらべず、あせらず、あきらめず」

福開原 正教寺住職 増崎 顕明

日々の寺務の多忙さに真宗の学びを確認できない私がここにあります。

「大無量寿経」の「嘆仏偈」にでてくる言葉に、「一切恐懼」とあります。この世を生きる私達の姿が、恐れおののきながら生きる者で

あるということですが。そして、「三誓偈」では「普濟諸貧苦」、私達はさまざまなかたちの貧しさに苦しむものとあります。

私達は白ずと貪りの心に振り回され、驕りのところで人を傷つけています。

親鸞聖人は、浄土を「大無辺際」「教行信証」（真仏土巻）という言葉で表現されています。浄土とは、一人も漏らさないと同時に、一人一人が主役である。そういう世界なのです。

（この世を生きる念仏の教え）（楽真）より
法事を勤めることは、私達のそれぞれの生活において、立ち止まって自分自身を見直すことでもあります。

えらばず、きらわす、みすてず
「えらばず、きらわす、みすてず」

（信国先生）の言葉

「くらべず、あせらず、あきらめず」

（竹中先生）の言葉

これからもこの二つの言葉を課題とし浄土の教えを聞く耳を育てていきたい、そう感じています。



門徒の日

熊本県 宝元寺住職 占井 大誠

当宝元寺では、毎年秋のお彼岸の初日を、「門徒の日」として、門徒さんのお楽しみの日に行っています。私のつたない説教の後、おぼちびん達がいろいろな芸をだします。歌、三味線、踊り等です。すごい人がいまして、なんと民謡の全国大会で総理大臣賞、つまり優勝されたんです。日本一のアマチュア民謡歌手です。大津町ではちよつとした有名人です。

私も何かをしなければとやったのが、以前から興味を持っていたマジックです。失敗もありましたが、大うけでした。

マジックは騙しです。シミーとしてやるのは楽しめるんですが、世の中悪用する輩がいまます。超能力、天より授かった特殊能力と称して、世間を欺きます。そして宗教が絡むと非常にタチが悪くなります。その最たるものが、オームの松本智津夫。座ったまま空中飛行ができるという。すごいじゃないか松本君。そして、もう忘れたいかもいらないハインド

なにもない手から出した。

おれだってできるぞお、て言っておきましよう。

「親あつての私」

福岡県 聖光寺住職 盛山 義諭

親がいなかったら子供は生まれません。これはわかりきった事です。私には父と母がいて両親の血が私に流れています。つまり両親が私になって生きています。親が亡くなった後、親に似た手先をさすりながら人の子はふつと亡き親を懐かしみます。考えてみれば両親にはそれぞれに両親がいて、その両親にもまた両親がときかのぼって行くと、十代前まで数えればなんと私には千二十四人の先祖の血が私の中に生きており、その頂点に

いるのが私でありこの数多くの先祖のお陰があつて今ここに私が生かされている事を忘れてはならないと思います。その数多くの親達がお心こめて拜んでこられたのが阿弥陀仏であり称えてこられたのがお念仏であります。人の命こま争士其の血が流れています。人

分は果たして仏さまに救われるという事です。人間はいつも何かで生きています。しかしこの世の

不完全なものばかりだから喜びに消え後には涙が残るだけです。人間という勝手気ままな考えによ

いるこの世の中を完全な世界である事がそもそも大きな間違いそれを初めて知った時に人生は苦う事がしみじみと味われてくるのでしょうか。人は阿弥陀仏の救いにそ人生に初めてゆるぎない落ち着の安らぎを得る事が出来ます。そ

人が希望と感謝に生かされる道がです。仏達の無数の親たちは阿弥陀に幸せに生き安らかに往生される人間に喜びを与えるものは、生かされる。合掌の生活であり、そこにすりかとうからくる平和な家庭の和れた日々が送れるのも日常の、日配り、心配り一が大切です。私

東日本大震災被災地を訪ねて① 『福島県南相馬市は 北陸真宗門徒移民の町』

宗務長 佛木 道宗

昨年十一月四日より六日まで、真宗教団連合主催の「東日本大震災に係る懇談会」に参加しました。

仙台市の東西本願寺別院からはじまり福島県南相馬市まで南下しそこから海岸沿いに北上、宮城県石巻市までの行程でした。

今回から三回にわたり、現地で見聞した被災地の現状をお伝えしようと思います。

十一月四日は、前日に二楽天ノーツルスの日本で沸き上がりそのお祭りムードが仙台駅周辺でも盛り上がっていました。

仙台空港周辺は、津波に襲われその映像は何度もテレビで見ることがありました。

空港は復興が進み美しく当時を想像することとは出来ませんでした。

しかし、口、仙台駅行きアクセス鉄道のプラットホームに立ち海岸の方を見れば建物らしきものはひとつもなく荒涼とした風景が一面に広がっていました。

実は、その快速電車で仙台駅まで十七分です。その十七分で住むところを失い仮設住宅での生活之余儀なくされている方々と優勝セールで浮かれ混み合う駅前とを二分しているようにも見えました。

バスで移動し川俣町、飯館村の峠を越える頃には渡された放射能を測定する線量計は、徐々に数値が高くなり、「居住制限区域」の車窓からはたくさんの方が今も尚余線活動を続けていました。

南相馬市に入ると線量は小さくなりましたが、写真の「大谷派原町別院」においても境内地を十センチ削り取る除染を行ったとのことでした。

この別院の創設は、二〇二年前の北陸加賀からの農民移住と深く関わっています。

寛政年間、当時の相馬藩は天明の大飢饉による人口の減少(六十四%減)に



より、幕府側における農民の移住は固く禁じられていましたが、加賀、能登、越後からこの法度を犯して組織的に移住が行われました。明治維新の頃には、移民門徒二丁戸を数えるにいたりました。

どのように移動出来たのでしょうか。北陸から各地区の真宗門徒が連携し、東北までの百里を越えるけもの道をつないでつなく相馬までの大移民物語が展開したそうです。(続く)

圓誠寺750回御遠忌法要

福井県 圓誠寺 齋藤 徳市

去る平成二十三年六月、各派宗務長・宗主様をお迎えし厳修された本山圓誠寺の親鸞聖人七百五十回御遠忌法要に、総代の一人としてお手伝いをさせて頂き、益々お念仏に對し喜びを深くして帰ったのが、つい最近のように思えます。

今の世の中、社会問題の原因を、家庭に求める見方があります。家庭が最も基本的な社会の単位だからです。今やその家庭から「中心」と言うものが無くなり、本来、中心であるべき父親は、家庭では隅の方に追いやら

れ、母親中心、いや、子供中心にさえなりつつあります。なぜ、父親たちに、これほど威厳が無くなってしまったのでしょうか。

それは、第二次世界大戦の敗北によって、あらゆる戦前の価値観を否定し、捨ててしまったからではないでしょうか。

政治体制や価値観が百八十度転覆し、戦前の立派な人々をも、ことごとく葬り去る教育が蔓延しました。

たとえ身勝手であっても「自分の頭で考える」事が、自立した人間としてもはやされる一方で、宗教は時代遅れで不必要な物と見なされ、人々は「自分は無宗教である」ことを、さも進歩的な人間であるかのように誇らしく語るようになってしまいました。

しかし、宗教と言うものは本当に時代遅れで、不必要な物なのでしょうか。人間の悩み、苦しみは尽きる事はなく「戦争が終わったから、悩みや苦しみが解放される」と言うようなものではありません。

世間一般の常識に照らしても、「無宗教の人間は信用できない。友達にするな」などと言われます。

また今の日本は一子供たちに夢がないと言われます。中心とすべき心の依拠を失い、将来の目標を見失って、社会全体が迷走しているのです。

父母に感謝し、ご先祖に感謝し、あらゆるものの恩を知り、感謝する事が、生活の中心とすべき要であります。

圓誠寺の前回の御遠忌法要（七百回忌）は、二日間厳修され、宗主様御親修の中、諸行事と共にお稚児さんも出しましたが、今回は東日本大震災や原子力発電所事故または豪雨による災害と、人自然の脅威と人間の驕りをつくづく思い知らされるなか、あまり派手にせず心に残る法要にすることを、期日は二十五年七月十四日、特別水代経会を午前中に、午後から親鸞聖人御遠忌法要をささやかに行うことで計画を致しました。何回か総代会を開く中、法要を迎えるにあたり御開山前卓の腐食が酷いので修復することになり、また、菊輪灯、御簾等の寄進、御門徒の奉加等により本堂内の修復等が見違えるようになりました。さらに法要が近づいて来たころ、真夏の法要では食中毒や僧侶の方の汗が大変なものであったこと、期日を十月十四日に延期し、計画を

再度見直しすることになりました。

延氏が功を奏したのか、本堂東縁側の改築、外縁、参道、外縁下の石畳、天永鉢（阿受トウロ）など、縁により新しくなり、法要日には御法主の

ご親修、派内法中、町内法中、御親戚法中、衆人を管むことができました。また、了慶寺住職藤枝

宏壽師による記念法話、二萌（小林寛明氏）の記念コンサートで華を添え、頂き、多数の御門徒様の協力により成功裏に法要を勤めることができました。

今回の法要を機に親鸞聖人を身近に感じていただき、今日まで受け継がれてきたお念仏の教え（親鸞聖人は、お念仏とは人々の心の中にある大きな深い闇を照らす光だと語られています）を、より一層広めんがため、また私のお寺、私たちのお寺・皆のお寺と、お寺が心の拠り所となるよう、作職と共に門信徒一同、これからもさらにお念仏を継承していきたいと念じています。

合掌



宗祖 750 回御遠忌に

めぐりあいて

福井県 道明寺 齊藤 隆

親鸞聖人の 750 回御遠忌が、平成 23 年 6 月 11 日から 3 日間という短い期間でしたが、執り行われました。同行全員が初めての

ことで暗中模索の中、無事に法要を終え一安心した記憶があります。次回の 800 回忌は 2061 年に執り行われる予定ですが遠い未来であるため法要自題が激変わりしているかもしれない。しかし、南無阿弥陀仏の言葉や思想は永遠に変わることはありません。その言葉や思想を子供や孫の代まで伝えて頂き、800 回忌法要を成功させましょう。

その他

私の家は本山の末寺である道明寺の檀家総代であり仏事係でもあります。その事を知ったのは 8 年前の 28 歳の時でした。それまでお寺の事は全く興味がなく、私が小学の時に境内で草野球をしてガラスを割ったり、大きな銀杏の木へ登ったりと、迷惑ばかりかけた記憶しかありませんでした。そんな若輩者だった

私が急遽同行の年配方と一緒に慣れない仏事作業を行うようになりました。当初はお寺の価値観や仕組みに違和感を覚えたことが、年配方のお寺を一所懸命盛り立てようとする気持ちに感銘を受け、今は可能な限りお寺のために貢献しています。

宗祖 750 回御遠忌に

めぐりあいて

福井県 道明寺 齊藤 元始

宗祖親鸞聖人の 750 回大遠忌法要にお手伝いさせていただき、その御縁に会えたことは我が人生においてこの上ない喜びと、幸運であったと有難く思っています。

私が口頭心にあることを申し上げます。

毎朝仏壇にお参りして念仏の一日が始まりますが、善導大師の言葉に「一心に捉って正直に進む」という教えがあります。これを私の心の支えとしております。

これは金子大栄先生の三誓偈の講義の中にも出てきますが、難しいことは言えません。私どもを救おうとする如来の願いがあり、深く受けとめ、深く感謝して、南無阿弥陀

仏の名号に一心につきまわって過ごすことは、この上ない喜びと思っております。

毎日のいろいろな出来事は素直に受け止めて、何事もこれでいいのだと受け止めた後、思いつく対策を正直に、また仏道はずさず進んでいきたいと思っております。

宗祖 750 回御遠忌に

めぐりあいて

正善寺住職 藤堂 尚夫

上西山正善寺の宗祖七五〇回御遠忌は平成二十四年八月七日、例年同日に行われている募参会並蘭経会法要と併修の形で勤めさせていただきました。記念事業として、御縁の修復内陣の床の張り替えをさせていただきました。昨日は真宗仏光寺派布教使、大行寺副住職佐竹英甲子師を御講師にお迎えいたしました。

佐竹師は「英月」というお名前で、国際派僧侶としてテレビにご出演されたり、各地で布教・講演活動に当たられております。また、アメリカ在任の折には「サンフランシスコ写経の会」を立ち上げられ、日本に戻ってから山口坊の大行寺やカルチャーセンターなどで、聖にはまらない白山な写経に取り組

んでおられます。

御法話では、サンフランシスコ写経の会二のお話などをしていたとき、人々が仏法に出遇い、ふれ合い、その中からお寺の原初ともいえるような「写経の会」になっていく過程をお伝えいただき、そこから阿弥陀様の御本願をお伝えいただきました。アメリカと日本の二つの国に花開くお念仏は、まさしく宗祖親鸞聖人のお伝えになられたお念仏の願いそのものと思われました。改めて、御同行御同朋の皆様と共に、お念仏の手を合わせ、親鸞聖人の御一生に思いをいたすことができた御遠慮でありました。

寄稿

八月二十日 大正末期

横越(本山のなきわい(IV)) 辻本 喜平(大正八年生)

7 ○涙で見送る 胸の中

この子が後の中江藤瀨先生だ
見れるぞどなたも 早よ〜と

せき立てられて 穴のぞく(典世の前の灯機だったのでせう。立時は言映由もなかった。)

8 ○おもちゃ屋 駄菓子屋 焼き万寿屋

樽を廻して (ケタルの中にもう一つ小さい樽)

「アイスクリンシー エーアイスクリンシー」

水をゴシ〜、カンナでけづり

小さい皿に山に盛り

赤い水を少しかけ

お待ちどうさま ハイ十銭

アーイライハイ イライハイ

みんな カーバイトの灯りつけ

おすな〜の客を待っている

證誠寺俳壇新春雑詠

和やかや法王厩蘇注ぐこれも慈悲

頼る子も還曆寺へ初参り

山門の成りて十年淑氣満つ

山本 恒

水落(道明寺)

恙なく朱蠟焔々初諷經

除夜の鐘撞きくる人の絶え間なく

淑氣満つ御影堂座し凡夫我

高市 妙玲

五郎丸(圓城寺)

越の紙漉ける十指を朱に染めて

初曆一写來の顎がぬつと出る

雪の野に余白の如き池光る

山本 一步

水落(道明寺)

老夫婦山門くぐり年新た

初日の出本山御堂照らしをり

跡継ぎも本山詣年迎ふ

竹内 實

萌生曰(覺善寺)

塵一つなき御影堂年新た

生かされてここまで来たや上希の春

心身のけじめをつけて初灯明

松原 京極

村国(淨徳寺)

拭き艶の廊下渡りて御慶仲ぶ

本山と寺内二ヶ寺へお年頭

正信偈わが家即ち初諷經

山岸世詩明

横越(道明寺)

除夜の鐘一人一音明けを呼ぶ

初詣松籟清く頬に受け

初灯明傘寿なかばの正信偈

吉田 貞琴

瓜生(道明寺)

護法会会費御芳名披露

月 日 御 芳 名

十二月三十日 南江守

十二月二十二日 東中野

南江守若衆報恩講勤まる

昨年十一月二十日、毎年の若衆報恩講が本堂寺住職、若衆として講仲間十四人で口口喜代土宅を御宿に勤まりました。

午後四時に集合し、正信念仏偈を唱和し、若の御伝鈔評談、住職の東日本大震災で被災した別院、寺院巡りで感じたことを中心としたお説教を聴聞しました。

住職より、この御講は、本山御正忌と同様に、正装(色衣)にて勤めてきている大変厳肅なものである。大変厳肅なもので、一と聞かされ、益々伝經の重みを感じていました。

六時を過ぎた頃より膳を囲んでのお斉がはじまり、和気あいあいと仏法と美味しいおもてなし料理、お酒を身と心で味わう夜長になりました。合掌(宿当道)



護法会

一、真宗山元派護法会会則

第一章 名称
第一条 本会は、真宗山元派護法会と称する。

第二章 目的
第二条 本会の目的は、真宗山元派宗制明水の教義、宗風に信頼し、報恩講感謝の誓念より扶宗護法に奉仕するものとする。

第三章 事業
第三条 本会は、前条の目的を達成する為に左の事業を行う。
一、布教伝導
二、声明、作法及び雅楽等を修練する事業
三、その他適当なる事業

第四章 会員
第四条 本会は真宗山元派の僧侶並びに門徒を以つて会員とする。
第五条 会員を分ちて左の通りとする。
一、普通会員は、口を納付するものとする。
二、賛助会員は、三口以上を納付するものとする。
三、特別会員は、十口以上を納付するものとする。
四、名誉会員は、三十口以上を納付するものとする。

第五章 会費
第六条 本会の会費は、口五百円とし、毎年之を納付するものとする。
第七条 本会の経費は会費中より之を支弁し、残額を真宗山元派の宗費に回付する。

第六章 会務

第八条 本会の会計年度は、真宗山元派の会計年度に同じ。

第九条 本会は、本部を真宗山元派宗務所、内局に、支部を真宗山元派各部道府県代表事務所に置く。
第十条 本部に左の役員を置く。
一、総委員長 一名
二、総委員 二名以内
総委員長は、宗務所内局宗務長之に当たり会務を総理する。
総委員は、宗務所内局の宗政監之に当たり、総委員長を補佐して会務を分掌し、総委員長事故ある時は、その職務を代理する。

第十一条 支部に左の役員を置く。
一、委員長 一名
二、協力委員 若干名
三、委員 若十名
四、評議員 若十名
委員長は、各都道府県代表之に当たり、当該都道府県内教区の会務を管理する。委員は、真宗山元派の一般僧侶之に当たり本会の目的達成に尽力するものとする。

第十二条 協力委員は、門徒会員中より委員長之を委嘱し、本会の目的達成に協力するものとする。
評議員は、委員並びに協力委員中より選出して、委員長之を委嘱し、主要案件を審議するものとする。

第十三条 付則
本会則は、発布の日より之を施行する。本会事業達成のため修行の組織を別に定める。

本会則の二條法会 活動への努力を要請いたします。ご手紙の件におし出で、それは幸いです。

一日法語

如来、世に興出したまうゆえは、
ただ弥陀本願海を説かんとなり。
五濁悪時の群生海、
如来如実の言を信ずべし。

〔意識〕

釈尊がこの世に出でたもうたのは、
ひとえに阿弥陀如来の本願の、広やか
なお心を説こうと願ってでありまし
た。

この世の無残さに傷つき、この世の
泥にまみれて生きて、しかもそれを痛
む人たちよ、釈尊のこの真実の教をひ
たむきに聞き、大悲のお心にめざめて
いこうではありませんか。

「教行信証」行巻・正信偈「真宗聖典」204頁

―「視察に出会うこと」― 寺川俊昭 ―

真実の教

真実の教えこそ、大切なのです。世の中にはさ
まざまな教えがありますけれども、真実の教え
によることこそ、決定的に大切なことです。

その真実の教えとは、私たちを深い迷いの
中にいるものとめざませつつ、その私たちを
如来の真実に呼び覚ます一言です。

その真実の教えを、親鸞聖人は「大無量寿経」
であると、高らかにかけられました。そして
この「大無量寿経」に真実の教えを聞き、それ
よつて浄土真宗を聞くのである。こう力をこめ
て聖人は、「立教開宗」を宣言なさったのです。

この「大経」は、阿弥陀如来と釈迦如来、この二
尊の恩徳を説く教えである、これが聖人の基本
的了解です。孤独の影をひめていた凡夫を救お
うとして、阿弥陀
如来は本願をおこ
し、その本願を、こ
の世の泥にまみれ
て生きる郡萌の救
いの道として説く、
ここに釈尊の出世
本懐がある。聖人
のこの「大経」の了
解を、私たちが仏
法を学ぶ根本指針
としたいと思いま
す。 ― 同上 ―



編集後記

人は生まれるという。しかし、老いゝがス
タートする(同じスピードで)ことでもある。
すると、人間は、みんな「老いる人(老人)」で
あるといつてもよいように思う。

老いゝゆく静けさが、深く、重く、広く、大きく
ありたいと願う。

ある人が「小さく小さく」生きよといわれる。
味わいたいことばである。

一年いつでも原稿や写真などを、左記の「発
行所」にお送りいただくと心うれしいかぎり
です。(写真は道明寺坊守)ご住職から御同
行の方々へ声かけいただき、全国の本山御同行の
開法の間(新聞)に育てていただければと念じ
ております。

合掌 (編集子)

(題字) 円誠寺二四代高帛浄泰師筆

平成二十六年一月二日発行

〒九一六〇〇三六 福井県鯖江市横越町二二一四二
発行所 真宗山元派護法会「證誠」編集室
電話(〇七八)五、一〇六、二六
振替金沢 一、三三四、二六

印刷所 鯖江市丸山町四丁目二二二

(有) 笹尾印刷所